

2024年度 統計データ分析コンペティション

論文審査会 総評

令和6年10月18日 審査委員長

2018年に始まった統計データ分析コンペティションも第7回を迎え、今年も無事、受賞論文を選考することができた。本コンペティションを支えていただいている関係者に論文審査会を代表して感謝申し上げたい。

今年は、高校生の部のエントリー件数が170件(前年105件)、論文提出件数が124件(前年79件)であったのに対し、大学生・一般の部のエントリー件数が139件(前年139件)、論文提出件数が62件(前年72件)となった。高校生の部ではエントリー件数、論文提出件数ともに大幅に増えたのに対し、大学生・一般の部ではエントリーに対して論文提出率が低く、残念ながら論文提出件数は微減となってしまった。

もちろん、大学生・一般の部の論文は政策提言を意識した読み応えのあるものが多く、質が低下したということではないが、今年、エントリーに対して論文提出率がなぜ下がったのかについては、事務局と共に原因を分析できればと考えている。

さて、高校に関しては、データに基づくレベルの高い探究活動が組織的に行われているという印象を持ち、コンペティションが高等学校教育に活かされつつあることを感じた。来年4月には、小中高の10年間にわたり、新しいカリキュラムで統計教育やデータサイエンス教育を受けてきた学生が大学に入学することとなる。そのトップランナーともいべき本コンペティション参加者が、大学の数理・データサイエンス・AI教育の発展に必要な、データに基づく自律的探究と課題解決を推進できるリーダー的存在となるのではないかと期待している。

今年の受賞論文も力作揃いだが、例年同様、学生らしい言い過ぎや、膨大な作業の中で軽微なうっかりミスが発生していることは審査事務局から指摘を受けている。日本統計協会の月刊誌「統計」掲載時までには、より論文らしい論文に改善したいと考えているが、原論文の元気な姿も少しでも残せればと思っている。なお、月刊誌「統計」2024年9月号では、「統計データ分析コンペティションを振り返る」が特集となっているので、参照いただければ幸いである。

高校生の部

昨年から、高校生の論文が、データをよく吟味する良い習慣と先行研究を記載し、仮説形成を特性要因図などで精緻に行うなど、大学生・一般の部より問題解決型のデータ分析としては好ましい姿となる傾向が顕著となった。一方、今年は贅沢な悩みかもしれないが、早くもそれが成熟の域に達したと思わせるところがあった。つまり、多くの高校で、審査委員がこれまで高く評価してきた論文のスタイルを採用する動き、データ分析プロセスの標準化が急速に進んだという印象を持った。

その中で、高校生の個々のデータへの素朴な探究心や試行錯誤などが少し薄れてきたのではないか、

「わくわく感」を持ってデータと対峙しているのかが気になりだした。今年の受賞論文は高校生の分析プロセスとしての優秀性と共に、自身が関心を持った社会課題に関連するデータを見つめて、追及する態度の清々しさのようなものも若干反映しているのではないかと考える。

誤解を与えるのは本意ではないが、現在指導に当たられている先生方が、社会問題解決のヒントとなる探究的データの分析の在り方、プロセスを過去の受賞論文を参考に追求して、それをもとに全国レベルでの指導が始まりつつあるのではないとも感じている。これら教育現場の活動の中で、多くの生徒たちが優れたデータ解析を楽しんでいただける将来を期待したい。

大学生・一般の部

元々、大学生・一般の部の優秀論文は、学術論文に近い先行研究サーベイや実証技術の高さで、さすがと思わせるものが多かったが、その傾向は続いている。むしろ高度な手法を適用したという分析備忘録的論文は減少したように思う。

これまで、先行研究に+ α するという学術論文の正統的な方法論に近いがため、高校生のような仮説形成の網羅性やデータの吟味はないという不満を大学生・一般の部に持っていた。しかし、今年の大学生・一般の部の優秀論文の中には、高校生の好ましい論文のスタイルに似た論文も現れ、時代の良い意味での移り変わりを感じた。また、大学生・一般の部では、日本社会や日本経済が抱えている政策課題の解決に挑戦した論文も多く読み応えがあった。

以上